

Philia as Agape : The Theme of Friendship in the Gospel of John

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原口, 尚彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/196

アガペーとしてのフィリア： ヨハネ福音書における友愛の主題*

原 口 尚 彰

1. はじめに
2. 語学的考察
3. ギリシア・ローマ思想におけるフィリア
4. ヨハネ福音書における愛の問題：アガペーとフィリアの交錯
5. 愛の極致としての自己犠牲
6. まとめと展望

1. はじめに

フィリア (φιλία) とフィレオー (φιλέω) は友愛に関するギリシア語名詞と動詞であるが、新約聖書ではあまり使用されない。しかし、ヨハネ福音書において、動詞フィレオーの使用例が 13 存在し (11: 3, 36; 12: 25; 15: 19; 16: 27; 20: 2; 21: 15, 16, 17), 他の新約文書と比して著しく使用頻度が高い。しかも、動詞アガパオーとフィレオーが互換的に使用されている例もある (例えば, 13: 23; 21: 7 と 20: 2 を比較せよ)。他方, ヨハネ 14-16 章に記されている別れの説教において, イエスは弟子たちを友と呼び (15: 10), 友のために命を捨てることに優る愛はないと述べている (ヨハ 15: 13)。そこでは, フィリア (友愛) の理想的姿が, アガペー (無償の愛) に重ねられている。ヨハネ福音書では, 他の福音書に勝ってフィリア (友愛) の主題が重要な役割を演じ, 愛の教説の一環をなしていると考えられる。

本研究は, ヨハネ福音書において独特な展開を示しているフィリア (友愛) の主題について, 釈義的・神学的考察を行うことを目的としている。まず, 予備的考察として愛を表現する言葉についての語学的分析を行い, 次に, ギリシア・ローマ世界の倫理思想における友愛についての言説を概観した上で, ヨハネ福音書中の関連箇所について釈義的分析を行う。最後に, 聖書神学的な考察を加えて, ヨハネ福音書の愛の教説の思想史的特質を明らかにしたい。

* 本稿は 2013 年 9 月 10 日に西南学院大学において行われた日本基督教学会第 53 回学術大会で行った口頭発表に加筆・訂正したものである。

2. 語学的考察

アガペー (ἀγάπη 愛) とフィリア (φιλία 友愛) は共に愛を表すギリシア語であり、古典文献においてアガペーは稀にしか使用されないが、フィリアは社会生活の様々な局面に現れる人間相互の愛を表す基本語彙として頻繁に使用される (ヘロドトス『歴史』7.130; プラトン『饗宴』179c; 『パイドロス』237c; アリストテレス『政治学』1242b; 1262b; クセノフォン『ソクラテスの想い出』2.6.29; イソクラテス『演説集』1.33; 6.11 他多数)¹。それに対して、新約聖書では事情が全く逆で、アガペーの使用回数が117回であるのに対して (マタ 24: 12; ルカ 11: 42; ヨハ 5: 42; 13: 35; 15: 9, 10, 13; 17: 26; ロマ 5: 5, 8; 8: 35, 39; I コリ 13: 1, 2, 3, 4, 8, 13 他多数)、フィリアの使用回数はわずかに1回に留まる (ヤコ 4: 4)²。

動詞形について言えば、新約聖書において、動詞アガパオー (ἀγαπάω) が144回 (マタ 5: 43, 44, 46; 6: 24; 19: 19; マコ 10: 21; 12: 30, 31; ルカ 6: 27, 32, 35; 7: 5, 42; ヨハ 3: 16, 19, 25; 13: 1, 23, 34; 15: 9, 12, 17; ロマ 8: 28, 37; 9: 13, 25; 13: 8, 9 他) 使用されているのに対して、動詞フィレオー (φιλέω) は25回 (マタ 6: 5; 10: 37; 23: 6; 26: 48; マコ 14: 44; ルカ 20: 46; 22: 47; ヨハ 11: 3, 36; 12: 25; 15: 19; 16: 27; 20: 2; 21: 15, 16, 17; I コリ 16: 22; テト 3: 15; 黙 3: 19; 22: 15) しか使用されておらず、前者の使用が圧倒的に多くなっている。

ヨハネ福音書において、名詞アガペー (ἀγάπη) は7回使用されているが (5: 42; 13: 35; 15: 9, 10, 13; 17: 26)、名詞フィリア (φιλία) は一度も使用されていない。動詞アガパオー (ἀγαπάω) が37回 (3: 16, 19, 25; 8: 42; 10: 17; 11: 5; 12: 43; 13: 1, 23, 34; 14: 15, 21, 23, 24, 28, 31; 15: 9, 12, 17; 17: 23, 24, 26; 19: 26; 21: 7, 15, 16, 20) 使用されているのに対して、動詞フィレオー (φιλέω) は13回 (11: 3, 36; 12: 25; 15: 19; 16: 27; 20: 2; 21: 15, 16, 17) 使用されている。さらに、ヨハネ福音書においては、アガパオーの使用が期待される神の愛を語る文脈で、フィレオーが使用される場合がある (ヨハ 5: 20; 16: 27)。他方、イエスのラザロへの愛を語る際には、アガパオーと並んで (11: 5)、フィレオーも使用されている (11: 3, 36)。また、愛弟子へのイエスの愛を語る際には、アガパオーが使われる場合も (13: 23; 21: 7)、フィレオーが使われる場合

1 詳しくは、LSJ 1934; R. Joy, *Le vocabulaire chrétien de l'amour est-il original? ἀγπᾶν et φιλεῖν dans le grec antique* (Bruxelles: ULB, 1968) を参照。

2 詳しくは、E. Stauffer, “ἀγαπάω κτλ.,” *ThWNT* II 34-55; G. Schneider, “ἀγάπη, ἀγάπῃ, ἀγαπητός,” *EWNT* II 19-29; G. Stählin, “φιλέω κτλ.,” *ThWNT* IX 112-144; W. Feneberg, “φιλέω,” *EWNT* II 1017-1018; R.F. Butler, *The Meaning of agapao and phileo in the Greek New Testament* (Lawrence: Coronado, 1977) 19-57 を参照。

もある（20：2）。第四福音書においては、両者の使用は互換的であると言える³。

特別な用例としては、世に属する者を世が愛することが（フィレオー）、イエスの愛に留まる者を世が憎むこと（ミセオー）と対照されている箇所が挙げられる（15：18-19）⁴。神の子イエスを受け入れない世と、イエスを信じる者たちとの絶対的な対立のもとに世界を解釈する二元論的思考がそこには働いている（1：9-11；17：9-19を参照）。

3. ギリシア・ローマ思想におけるフィリア

ギリシア・ローマ思想において、フィリアは倫理的議論の対象となる主要な主題の一つであった。例えば、ギリシアの哲学者アリストテレスは、『弁論術』の中で、フィリア（φιλία）を「友を愛すること」と定義し、友（φίλος）とは、「誰かを愛し、かつ、愛し返される者」であるとしている（『弁論術』1381a）。また、友は苦楽を共にし、相互に相手のために考えるのであり、何が善であり、何が悪であるかの価値観を共有するとしている（『弁論術』1381a）。

さらに、アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』において、フィリアを徳（ἀρετή）の一つと位置付け、社会生活に不可欠なものとしている（『ニコマコス倫理学』1155a）⁵。フィリアの本質は相互性にあり（1157a）、友は互いに好意を持ち、互いに善なることを願うとしている（1156a；1166a）。アリストテレスはフィリアの概念を広く捉え、友人間の友情

-
- 3 G. Stählin, “φιλέω κτλ,” *ThWNT* IX 112-144; W. Feneberg, “φιλέω,” *EWNT* II 1017-1018; Butler, 58-72; R. Bultmann, *Das Evangelium des Johannes* (10. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht; 1941) 190 Anm.1; R.E. Brown, *The Gospel according to John* (vol.I; AB29; Garden City: Doubleday, 1967) 498; R. Schnackenburg, *Das Johannesevangelium* (Bd.III; Freiburg: Herder, 1971) 432-433, 434; M. Lattke, *Einheit im Wort. Die spezifische Bedeutung von ἀγάπη, ἀγαπᾶν und φιλεῖν im Johannesevangelium* (München: Kösel, 1975) 11-17, 28; C.K. Barrett, *The Gospel according to St. John* (2nd ed.; London: SPCK, 1978) 390, 477, 584; S.H. Ringe, *Wisdom's Friends: Community and Christology in the Fourth Gospel* (Louisville: Westminster John Knox, 1999) 65; K. Scholtissek, “„Eine größere Liebe als diese hat niemand, als wenn einer sein Leben hingibt für seine Freunde“ (Joh 15,13),” in *Die hellenistische Freundschaftsethik in Kontexte des Johannesevangelium* (hrsg. v. J. Frey / U. Schnelle; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2004) 426-27; A.J. Köstenberger, *John* (Grand Rapids: Baker, 2004) 596; H. Thyen, *Das Johannesevangelium* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) 213, 788; E.E. Popkes, *Die Theologie der Liebe Gottes in den johanneischen Schriften. Zur Semantik der Liebe und zum Motivkreis des Dualismus* (WUNT II 197; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) 47; J.R. Michaelis, *The Gospel of John* (NICNT; Grand Rapids: Eerdmans, 2010) 1043; U.C. von Wahlde, *The Gospel of John and Letters of John* (3 vols; Grand Rapids: Eerdmans, 2010) II 171.
- 4 A.C. Mitchell, “‘Greet the Friends by Name’: New Testament Evidence for the Greco-Roman *Topos* of Friendship,” in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 257-259.
- 5 F. Hauck, “Die Freundschaft bei den Griechen und im neuen Testament,” in *Festgabe für Theodor Zahn* (Leipzig: Deichert, 1928) 216-218; Scholtissek, 417-418.

だけではなく、親子の愛や、祖国愛や同胞愛もその中に含めている（1156a-1158a）⁶。フィリアが成り立つ前提は、考え方における一致（ὁμόνοια）である（1167a）。さらに、彼はフィリアを、有用性による愛と快楽による愛と善き人々の間の愛の三種に分け、善き人々の間の愛を最上の愛としている（1156a-1158a）⁷。善き人は自己愛を越えて他者を愛し、友や祖国のために尽くし、必要であれば命を捨てることも惜しまないとしている（1169a）。

キケロは賢人ガイウス・ラエリウスによる友情についての対話を紹介することを通して、共和政ローマ期のローマ人選良たちが抱いていた友愛（amicitia）の理想について語っている。ラエリウスは、友愛とは「好意と親愛の情に裏打ちされた意見の一致」と定義する（『ラエリウス・友情について』vi. 20）。また、友愛において大切なことは相手に忠誠を尽くす信義、さらには、徳と真心であるとする（viii. 28-32；xxiv. 100）⁸。友愛は功利的な目的から相手の機嫌を取る追従とは異なっている。ラエリウスは、相手には耳の痛いことであっても真実を率直に語るのが真の友人であることを強調する（xxiv. 89-100）⁹。

帝政ローマ期において、プルタルコスも、倫理的教説の一環として友愛の問題に言及している。彼はアリストテレスに倣って、真の友愛において重要なことは、徳と親密な交わりと有益さとし（「多くの友を持つことについて」『モラリア』94B）、友は慎重に考えて選ぶべきであるとしている（94C-E）。特に、権力者におもねる追従と、真実を語る友情との区別は重要であり、プルタルコスは両者の違いについて詳しく論じている（「似て非なる友について—いかにして追従者と友人を見分けるか」『モラリア』48E-78E）¹⁰。プルタルコスによると、追従者は名声や権力がある者の周りに群がるが、事情が変わるとたちまちいなくなってしまう（49D）。本当の友は、共に真実を語り、自らの判断を分かち合う（53B；さらに、ルキアノス『トクサリス』5も参照）。真の友とは、常に賞賛してくれる者ではなく、良く吟味して、必要ならば、率直に意見をのべて過ちを正し、叱責してくれる者であるとされる（66A）¹¹。

6 Hauck, 217；D. Konstan, *Friendship in the Classical World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997) 68-72 を参照。

7 Konstan, 72-78；F.M. Schroeder, "Friendship in Aristotle and Some Peripatetic Philosophers," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34；ed. J.T. Fitzgerald；Atlanta: Scholars, 1997) 41-45；R.F. Hock, "Jesus, the Beloved Disciple and Greco-Roman Friendship Conventions," in *Christian Origins and Greco-Roman Culture (Early Christianity in its Hellenistic Context Vol. I)*；eds. S.E. Porter / A.W. Pitts；Leiden: Brill, 2013) 202.

8 Hock, 202-203；B. Fiore, S.J., "The Theory and Practice of Friendship in Cicero," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34；ed. J.T. Fitzgerald；Atlanta: Scholars, 1997) 60-63.

9 B. Fiore, S.J., 65.

10 Konstan, 98-100；E.N. O'Neil, "Plutarch on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34；ed. J.T. Fitzgerald；Atlanta: Scholars, 1997) 109, 113-122.

11 Konstan, 105-108；Scholtissek, 420.

ヘレニズム・ユダヤ教文献は、ギリシア・ローマ世界の倫理思想の影響下に、旧約聖書の知恵文学に萌芽的に見られる友人論を（箴 17: 17; 18: 24; 27: 6; コヘ 4: 9-12）、発展・深化させた。ベン・シラの知恵の著者は、古い友人を大切にすることを勧めると共に（シラ 9: 10-11）、どんな時も裏切ることのない誠実な友と、順境の時には近づいてくが、状況が悪くなると去ってしまう不誠実な友を区別し、後者に気を付けるように繰り返し警告している（6: 1-17; 37: 1-6）¹²。他方、彼は神への信仰において真の友愛が成立すると考え、「主を恐れる者は真の友愛（φιλία）を持つ」としている（6: 17）。

アレクサンドリアのフィロンは、友愛の本質を、意見の一致（『神のものの相続人』 83; 『十戒各論』 I 70; 『徳論』 35）と交わり（『十戒各論』 II 119）のうちに見るが、真の友愛と阿諛追従を峻別し、後者を有害な悪徳の一つとして再三にわたり非難している（『律法書の寓意的解釈』 III 10, 182; 『栽培』 106; 『言語の混乱』 48; 『神のものの相続人』 21）¹³。彼はモーセを例にとって、真の友は真実を率直に語るものであるとしている（『相続人』 21）¹⁴。イスラエル人達は同胞であり、友である（『モーセの生涯』 I 39, 303, 307, 322; II 42, 171, 273）。彼らは神を信じる故に、神との友好関係に置かれている（『徳論』 21, 175）。ユダヤ人の間に存在する絆は神学的基礎の上に成立している。

4. ヨハネ福音書における愛の主題：アガペーとフィリアの交錯

ヨハネ福音書における愛の問題を考える出発点は、世を愛しその独り子を惜しまずに与えた神の愛（ἀγάπη）であり、それは一方的に与えられる賜物としての性格を持っている（ヨハ 3: 16; さらに、I ヨハ 4: 11-12 を参照）¹⁵。また、父なる神はイエスが自己の命を惜しまず捨てる故に御子を愛しているとされている（ヨハ 10: 17）。良い羊飼いのたとえ話の中で、イエスは良い羊飼いは羊のために命を捨てると述べる（10: 11, 15）。他方、父は御子を愛する故に、すべてをその手に委ねている（3: 35; 13: 3; 17: 24 も参照）。さらに、父が御子を愛するように、イエスは弟子たちを愛していたとされる（15: 9; 17: 23）。特に、最後の晩餐の席上でなされた別れの説教において、御子イエスの愛を受けた弟子た

¹² Klaus, 8-9.

¹³ G.E. Sterling, “The Bond of Humanity: Friendship in Philo of Alexandria,” in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 206-207.

¹⁴ Sterling, 207, 209

¹⁵ Barrett, 215-216; Schnackenburg, *Johannesevangelium* I 423-425; J. Augenstein, *Das Liebesgebot im Johannesevangelium und in den Johannesbriefen* (BWANT 134; Stuttgart: Kohlhammer, 1993) 62; Popkes, 172-174, 222-225, 239-246; 但し、世への神の愛を語る箇所は、第四福音書の中ではこの箇所だけである。Lattke, 67; Popkes, 246 を参照。

ちが (13: 1; 14: 21), それに倣って, 互いに愛し合うことが新しい戒めとして求められている (13: 34; 15: 12, 17; さらに, I ヨハ 3: 11, 23; 4: 11, 12; II ヨハ 1: 5 も参照)¹⁶。互いに愛し合うことは彼らがイエスの弟子であることを示すしるしとなる (13: 35)。主を愛する者は, 主が守るようにと命じた戒めを守る (14: 15)。互いに愛し合うことは, イエスが示した模範に従って, 互いの足を洗い合い, 互いに仕え合うこととも表現されている (13: 14-15)¹⁷。ここでも, 愛 (ἀγάπη) が持つ利他的・奉仕的性格が強調されている。

他方, ヨハネ福音書におけるイエスと登場人物たちの関係には, 友愛の要素が認められる場合がある。例えば, イエスはマルタとマリアとラザロの三人の兄弟姉妹を愛していた (ἠγάπα) とされている (11: 5)。イエスはラザロを「私たちの友 (ὁ φίλος ἡμῶν)」と呼んでいるが (11: 11), 弟子たちやユダヤ人たちは, イエスは彼を友として愛していた (ἐφίλει) と認識していた (11: 3, 36)。イエスがラザロの死を知って, ベタニアのマルタとマリアの家へ行き, マリアについてラザロの墓のところ向かい, そこでマリアやその知り合いの人々が泣いているのを見て, 深く心を動かし, 涙を流している (11: 33-35)。これはラザロの親しい友人としてのイエスの感情の表白であると考えられる¹⁸。

イエスと弟子たちを結びつけている師弟愛には, 友愛の要素も存在している。ラザロの病気の知らせの二日後に, 敵対し, 命を狙う勢力がいるユダヤへ赴く決意をイエスが明らかにする (11: 7-8, 14-15)。イエスはラザロが死去したことを知って, そのことを弟子たちに当初は婉曲表現で間接的に伝えるが, 弟子たちが十分に理解しなかったので, 「ラザロは死んだのだ」と包み隠さずにはっきりと (παρησιᾶ) 告げた上で, そのもとへ行こうと述べる。この率直さは弟子たちに対する真の友愛のしるしであると考えられる (キケロ『ラエリウス・友情について』xxiv. 89-100; プルタルコス『モラリア』66A; ルキアノス『トクサリス』5)¹⁹。これに対して, 弟子の一人であるトマスは仲間の弟子たちに対して, 「私たちも行って, 一緒に死のうではないか?」と呼びかけている (11: 16)。苦楽を共にし, 順境にあっても苦境にあっても共に忠誠を尽くし, 運命を共にするのは友愛の本来の姿とされていた (アリストテレス『弁論術』1381a; 『ニコマコス倫理学』1169a; キケロ『ラ

16 Popkes, 274-283; M. Wolter, "Der Heilstod Jesu als theologisches Argument," in *Deutungen des Todes Jesu im Neuen Testament* (hrsg. v. J. Frey / J. Schröter; WUNT 181; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005) 306.

17 Ringe, 66.

18 Lattke, 63.

19 R. Zimmermann, "Narrative Ethik im Johannesevangelium," in *Narrativität und Theologie im Johannesevangelium* (hrsg. v. J. Frey / U. Poplutz; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2012) 168-169.

エリウス・友情について』 viii. 28-32 ; xxiv. 100 他)。

イエスは最後の晩餐の際には、「この世を去って父のもとへ赴く時がやって来ていることを知って、世にある自分の者たち (=弟子たち) を最後まで (徹底的に) 愛し通した (ἀγαπήσας τοὺς ἰδίους τοὺς ἐν τῷ κόσμῳ εἰς τέλος ἠγάπησεν αὐτοὺς)」とされている (13: 1)。ここには、親しい者たちとの別離の情が色濃く漂っている。晩餐の席上、イエスが弟子たちの中に裏切る者の存在を宣言し (13: 18-30)、イエスが栄光を受ける時が来たことを厳かに告げる (13: 31-33)。「主よ、どこに行くのかですか?」という問いに対して、「私が行くところに今はついて行くことが出来ないが、後について行くことになる」とイエスと言うと (13: 36)、ペトロは、「今はついて行くことができないのですか? あなたのために私の命を捨てます」と答える (13: 37)。ペトロの言葉も、友のために自分の命を捨てる友愛の理想を語っているが、イエスはこの段階ではペトロにそのことを実行する力がないことを見通しており、彼の否認を予告している (13: 38; 18: 27)²⁰。

さらに、15: 12-17 のところでは、イエスが弟子たちに対して互いに愛し合うことを再度勧める勧告の言葉の中で (15: 12, 17 を参照)、愛の戒めを実行することを条件に弟子たちを明示的に「私の友 (φίλοι)」と呼んでいる (15: 14-15)。その理由は、彼らが主人の行動の理由を理解しない僕と異なり、イエスによって神の意思をはっきりと示され、正しい理解を持つ機会を与えられていることとされていることである (15: 15)²¹。初期ユダヤ教文献において、アブラハムや (イザ 41: 8 LXX; ヨベ 19: 9; アブ黙 9: 6; 10: 6; アブ遺 13: 6; フィロン『覚醒』 55-57; 『アブラハムの生涯』 273; さらに、ヤコ 2: 23; I クレ 10: 1; 17: 2 も参照)、ヤコブや (ヨセ・アセ 23: 10)、レビや (ヨベ 30: 20)、モーセが (出 33: 11 LXX; フィロン『モーセの生涯』 I 156)、「神の友」と呼ばれる場合があった。彼らは神と語ることを通して神の意思についての知識を持つようになった故にそう呼ばれている (知 7: 27 も参照)²²。アレクサンドリアのフィロンは、神は友であるアブラハムに対して何も隠すことはなかったとしている (フィロン『覚醒』 56)。さらに、賢人は神を知る故に神の友であるとも述べている (『相続人』 21; さらに、知 7: 27 も参照)。

また、イエスの特別に親しい関係を強調して愛弟子について、「イエスが愛していた弟子」と表現されているが (13: 23; 19: 26; 20: 2; 21: 7)、ヨハ 20: 2 では、愛弟子に対す

20 Popkes, 254-255; J. Schröter, “Überlegungen zur Deutung des Todes Jesu im Johannesevangelium,” in *Religionsgeschichte des Neuen Testaments* (FS. Klaus Berger; hrsg. v. A. von Dobbeler / K. Erlemann / R. Heiligenthal; Tübingen: Francke, 2000) 275-276.

21 Bultmann, 418; Michaelis, 459; H.-J. Klauck, “Kirche als Freundesgemeinschaft? Auf Spurensuche im Neuen Testament,” *MThZ* 42 (1991) 4; L. Morris, *The Gospel of John* (Rev. ed.; NICNT; Grand Rapids: Eerdmans, 1995) 599-600.

22 Augenstein, 77-78 を参照。

るイエスの愛について、フィレオーが使われている(20: 2)²³。愛弟子は最後の晩餐の際に、イエスの直ぐ近くの席に着いていて、イエスを裏切る者が誰なのかを知るヒントをイエスから聞き出している(13: 23-26)。後に、死期が迫った十字架上のイエスはこの弟子に対して自分の母の世話を託し、愛弟子は彼女を引き取っている(19: 26-27)²⁴。復活・顕現物語において、愛弟子は、イエスが埋葬された墓の入り口の石が取り除けられ、墓が空であるというマグダラのマリアの報告を受け(20: 1-2)、ペトロに先駆けてイエスが埋葬された墓に駆けつけて、報告の通りであることを確認している(20: 3-10)。

5. 愛の極致としての自己犠牲

別れの説教における愛についての再度の発言において、イエスが弟子たちに愛(ἀγάπη)の神髄を説き明かし、最上の愛(ἀγάπη)は、友のために命を捨てることであるとしている(ヨハ 15: 13)。ギリシア・ローマ世界には、無私の愛の極致として祖国や愛する者や友のために命を捨てることを称揚する伝統があった。プラトンは対話篇の中で、他の者たちが救われるために自らの死を引き受けることは賞賛に値する徳行であると語る(『メネクセノス』237ab)。また、彼はギリシア悲劇に描かれている夫の身代わりとして命を捨てたアルケステスの例を挙げて(エウリピデス『アルケステス』290 以下; 630 以下)、相手のために命を捨てる者は愛する者以外にはないとしている(プラトン『饗宴』vii.179b-180a)。アリストテレスは、善き人は友や祖国のために命を捨てることも辞さないとしている(『ニコマコス倫理学』IX 8, 9 1169a)。他方、ディオゲネス・ラエルティオスによれば、哲学者のエピキュロスも、賢者は時として友のために死ぬことがあると述べている(『哲学者列伝』X.1.121b)²⁵。

ディオゲネス・ラエルティオスによれば、ストア派の賢者も理性にかなった仕方であれば、祖国や友のために自分の命を捨てると主張していたとされていた(『哲学者列伝』VII.1.130)。実際に、ストア派哲学者のエピクテトスは、友のために苦しみ、死ぬ覚悟を持つことを勧めている(『語録』2.7.3)。また、セネカは、友情の真価を友のために喜んで自己の命を捨てることに見ている(『書簡』I 9.10)。

ヘレニズム・ユダヤ教文献にも、友のために命を投げ出す理想を語る言葉が見られる。例えば、マカベア戦争の際に迫害の中でも妥協せず、父祖たちの律法を守るために命を捨

23 イエスと愛弟子との間の友愛関係については、Hock, 206-212 を参照。

24 Ringe, 79-80 もこの点に注目する。

25 Konstan, 109.

てた殉教者たちが存在した（I マカ 1：62-64；II マカ 6：28；7：9, 11；IV マカ 17：20-22）。また、アンティオコス王の軍隊に抵抗する反乱軍を率いたユダ・マカバイは、兵士たちに、律法と祖国のために死ぬ覚悟をさせたとされている（II マカ 8：21）。さらに、彼は戦況が不利になった時にも、退却せず、戦闘を続けることを勧めて、「断じて、敵に後ろを見せてはならない。死ぬべき時が来たなら、同胞のために潔く死のうではないかと」と語っている（I マカ 9：10）²⁶。

最上の愛（ἀγάπη）は、友のために命を捨てることであるとするイエス発言は（15：13），こうした古典古代の友愛の理想に一致する²⁷。そこでは、友愛（φιλία）の極致が、自己犠牲的な性格において、無償の愛（ἀγάπη）に近づくと考えられている。但し、ヨハ 15：13 の発言はキリスト論的な基礎付けを持っている。先行する 15：9-12 の部分によると、神の愛（ἀγάπη）を受けて、イエスは弟子たちを愛した（15：9）。弟子たちはイエスの愛（ἀγάπη）に留まるために、互いに愛し合いなさい（ἀγαπάτε ἀλλήλους）というイエスの戒めを守ることが求められる（15：10, 12）²⁸。言葉を換えて言えば、この新しい戒めを一貫して実践する中で、友のために命を捨てる友愛の理想が実現し、最高の愛に達するということが言われている（15：13）。しかも、弟子たちを愛したイエス自身の愛は、良い羊飼いの譬え話しにおける、羊のために命を捨てる羊飼いの行為のように自己犠牲的な要素を含んでいる（10：11, 15）²⁹。従って、イエスの愛に応えた弟子たち相互の愛も究極的には自己犠牲的な性格を持つことが期待されている³⁰。尚、I ヨハ 3：16 は、「その方が私たちのために命を捨てて下さったことのうちに、私たちは愛を知ったのであり、私たちは友のために命を捨てる義務がある」と述べ、愛の自己犠牲的な性格をキリスト論的に基礎付けている。

第四福音書の最後のところに記されている、ガリラヤ湖畔における復活顕現物語は（21：1-23）、後半部に、復活の主と弟子のペトロの間に交わされた対話を伝えている（21：15-19）。キリストはペトロに対して「私を愛するか」と三度尋ね、ペトロは、「あな

26 旧約聖書には、ダビデを自分自身のように愛し、身の危険を顧みず、彼を父のサウルから庇って逃がしてやったヨナタンの友情の例があるが、まだ、友のために命を捨てる段階には到っていない（サム上 18：1-4；20：1-42）。

27 Barrett, 477；G.R. Beasley-Murray, *John* (WBC36；Waco, TX：Word, 1987) 274；S. van Tilborg, *Imaginative Love in John* (Leiden：Brill, 1993) 50-154；U. Wilckens, *Das Evangelium nach Johannes* (NTD 4；Göttingen：Vandenhoeck & Ruprecht, 1997) 241；U. Schnelle, *Das Evangelium nach Johannes* (ThHKNT 4；Leipzig：Evangelische Verlagsanstalt, 1998) 242；Klauck, 5；Schröter, 263-287；Michaelis, 458；Popkes, 308-309；Mitchell, 258；Zimmermann, 140。

28 Lattke, 166-168；von Wahlde, II 677。

29 Bultmann, 417；Wilckens, 214；Morris, 599；F.J. Moloney, S.D.J. *The Gospel of John* (Sacra Pagina 4；Collegeville, MN：The Liturgical Press, 1998) 425；K. Wenghst, *Das Johannesevangelium* (ThKNT 4；2.Teilband；Stuttgart；Kohlhammer, 2001) 144-145；Augenstein, 71, 73-74；Schröter, 268-270；Popkes, 181-183, 309-310。

30 van Tilborg, 161；Schnelle, 242；Michaelis, 812。

たを愛していることはご存じです」と三度答え、キリストは彼に羊を飼う務めを与える言葉を三度繰り返している(21: 15-17)。ほぼ同じ内容の遣り取りが三回繰り返されるのは、イエスの逮捕の際にイエスとの関係を探ねられたペトロが、三度にわたり、自分はイエスを知らないと言って裏切ったことに対応していると考えられる(18: 17, 25-27を参照)³¹。キリストは初めの二回の質問において動詞アガパオーを用いて、ペトロが彼を愛するかどうか尋ねているが(21: 15, 16)、三度目には動詞フィレオーを用いている(21: 17)。これに対して、ペトロは三度ともフィレオーを用いて愛する行為を表現している(21: 15, 16; 21: 17)。ヨハネ福音書において、アガパオーとフィレオーの使用が互換的であることに鑑みて、批評的注解者たちの大多数はキリストが三度目の発言において動詞フィレオーを用いていることに、特別な意味はないと考え、それ以上の考察を与えてはいない³²。しかし、この文脈においてアガパオーとフィレオーが互換的に用いられていることには、特別な意図が込められていると考えられる。続く言葉において、キリストはペトロが将来、キリストに従う故に殉教する可能性があることを示唆している(21: 18-19)。キリストを愛する(フィレオー)かどうかと問うことは、キリストの友として、託された羊の群れを飼い(21: 17)、キリストのために命を捨てる覚悟があるかどうかと問うことを意味している(ヨハ 15: 13を参照)³³。ヨハネ福音書の理解において、友愛(フィリア)はその極限において、自己犠牲的な愛(アガペー)に一致するからである。

6. まとめと展望

ヨハネ福音書において友愛のテーマは大きな比重を持っている。この福音書において動詞フィレオーは13回使用され、新約文書の中では目立って使用頻度が高い。新約聖書において愛する行為を表現するには動詞アガパオーを使うのが通例であるが、第四福音書においては、アガパオーに代えてフィレオーが使用される場合もあり(5: 20; 16: 27; 20: 2)、両動詞は互換的に機能している。

別れの説教において、イエスは弟子たちに対して、最上の愛(アガペー)は、友のため

31 Barrett, 584; Morris, 767; Augenstein, 38-39.

32 Bultmann, 551 Anm.2; Brown, *John* II 1102-1103; Barrett, 584; Beasley-Murray, 394; Morris, 770; Moloney, 559; Augenstein, 38 Anm.87; Wengst, *Johannesevangelium* II 320 Anm.42; Thyen, 788; Ringe, 65, 82; von Wahlde, II 892.

33 Schnackenburg, *Johannesevangelium* III 437; Wilckens, 326-327; van Tilborg, 154-157; Köstenberger, 596; J.H. Neyrey, S.J. *The Gospel of John* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007) 339-340; von Wahlde, II 893.

に命を捨てることであると教えている（ヨハ 15：13）。祖国や友のために自分の命を投げ出すことを惜しまないギリシア・ローマ世界の友愛の理想は、キリストの愛とキリストを愛する弟子たちの愛の例示となっており、アガペーについての言説とフィリアについての言説は密接不可分になっている。

復活のキリストとペトロとのガリラヤ湖畔における対話において、キリストはペトロに対して「私を愛するか」と三度尋ね、ペトロは、「あなたを愛していることはご存じです」と三度答える。キリストははじめの二回の質問において動詞アガパオーを用いているが（21：15, 16）、三度目には動詞フィレオーを用いている（21：17）。キリストを愛する（フィレオー）かどうかと問うことは、キリストの友として、キリストのために命を捨てる覚悟があるかどうかと問うことであった（ヨハ 15：13；21：18-19 を参照）。ヨハネ福音書の理解において、友愛（フィリア）はその極限において、自己犠牲的な愛（アガペー）に一致するのである。

ヨハネ福音書の愛の教説において、イエスの弟子たちは、共観福音書にあるような、隣人愛や（マタ 22：39；マコ 12：30；ルカ 10：25）、愛敵（マタ 5：43-48；ルカ 6：27-35）ではなく、弟子たちが相互に愛し合うこと、つまり、兄弟愛が求められている（ヨハ 13：34-35；15：17）³⁴。愛の対象が信仰者からなる共同体内に限定されていることは、ヨハネ福音書が社会倫理的視野を欠いているしるしであるとして、従来は否定的に評価されがちであった³⁵。しかし、この愛の要求水準は高く、互いに仕え合い（13：14-15）、互いのために命を捨てることが求められている（15：13）。共観福音書において説かれている隣人愛は、レビ 19：18 の戒めを土台としており、「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」という内容である（マタ 22：39；マコ 12：30；ルカ 10：25）。共観福音書が説く隣人愛は、レビ記において求められている同胞愛という限定を越えて人類愛の領域に達している（ルカ 10：25-37 を参照）。しかし、この愛は自己愛を前提にして、自分を愛するのと同程度まで他者を愛するように促すに留まっている。ヨハネ福音書が説く兄弟愛は相互愛の枠付けはあるが、友愛の理想に従って、友のために自分の命を投げ出すことを求めているのであるから、自己愛を越えて他者を愛することを志向していると言える。ここでは極限に近い自己犠牲的な愛が目指されている³⁶。

このような特異な強調点を持った兄弟愛の思想が生まれた原因は、ヨハネ福音書を生み

34 Bultmann, 405；Lattke, 210-211；Ringe, 68；Popkes, 40-49, 264-265.

35 例えば、W.A. Meeks, "The Ethics of the Fourth Evangelist," in *Exploring the Gospel of John* (eds. R.A. Culpepper / C.C. Black；FS. D. Moody Smith；Louisville：Westminster John Knox, 1996) 317-326 を参照。

36 Popkes, 262-264.

出したヨハネ共同体が置かれた状況に求められる。イエスが十字架の死に三日後に復活し、昇天して父なる神のもとに帰った後に、残された弟子たちに象徴されるキリスト教共同体は、世界に取り残され、敵対的なこの世の勢力に取り囲まれて、孤立していた。イエスをメシアと告白する者たちは、既にユダヤ教のシナゴグから追放されていた（9：22, 34；16：2）³⁷。イエスの愛に留まる者たちは（13：1；15：9-10）、世の憎しみの対象になっていた（15：18-19）。彼らは社会の多数から嫌われ、迫害されていた（15：20-21）。彼らを迫害する者たちは、異端者に厳しく処置することを通して神に仕えていると思い込んでいた（16：2）³⁸。このような状況の中で、信徒たちの支えとなるのは、父のもとから御子が下した聖霊、即ち、真理の霊（15：17, 26；16：13）、助け主（14：16, 26；15：26；16：7）によって教えられ、真理を知っているという深い確信もさることながら、共同体の成員間の強い連帯であったと考えられる。かくして、彼らは別れの説教の際に与えられた新しい戒めを遵守して、自分の命を投げ出す程に互いに愛し合うことが重要になったのであった（13：34-35；15：17）³⁹。

37 J.L. Martyn, *History & Theology in the Fourth Gospel* (Nashville : Abingdon, 1979) 42-62 ; K. Wengst, *Bedrängte Gemeinde und verherrlichter Christus* (München : Kaiser, 1992) 75-104.

38 Martyn, 47-48 ; R.E. Brown, *The Community of the Beloved Disciple : the Life, Loves, and Hates of an Individual Church in New Testament Times* (New York : Paulist, 1979) 42-43, 65-66.

39 Augenstein, 87-88 ; Popkes, 46 ; Mitchell, 258-259.